

pleomorphic xanthoastrocytoma であり、嚢胞壁には腫瘍細胞はみられなかった。

上記3症例は画像上きわめて類似した所見を呈していたが、画像所見を詳しく観察すれば嚢胞壁の特徴および壁在結節の性状によって術前に鑑別診断がある程度可能であり手術計画を立てる上で有用であると考えられた。

2A-93) 空腸平滑筋肉腫の頭蓋骨転移の1例

小股 整・今野 公和 (総合病院国保)  
高橋 祥 水原郷病院  
脳神経外科

【目的】脳外科領域においては平滑筋肉腫の脳内及び髄膜転移が数例報告されている。今回、我々は頭蓋骨転移を来した空腸原発平滑筋肉腫を経験したので報告する。  
【症例及び経過】症例は65才女性、15年前に空腸平滑筋肉腫の切除をうけた。以後、肝転移、腹膜転移に対して5回の手術をうけた。'92年9月より左前頭部皮下腫瘍を自覚、9月16日当科受診、神経症状なし。全身状態良好。頭皮下に弾性硬の腫瘍あり。CT、MRIにて左前頭骨腫瘍あり。血管写にて左中硬膜及び副硬膜動脈より栄養される腫瘍陰影あり。9月24日、全麻下に骨腫瘍摘出術、レジンによる頭蓋形成術施行。組織診断は平滑筋肉腫。術後経過良好、神経症状なく退院。  
【結果及び結語】平滑筋肉腫の頭蓋骨転移例を報告した。神経症状は認めなかったが、腫瘍の増大が急速であること、全身状態良好であること、原発巣からの転移は全身にあるも予後は比較的長期生存がみこまれることにより、摘出術が選択され、結果的にも良好だった。

2A-94) 転移性脳腫瘍と思われる小脳橋角部分化型腺癌の1例

数又 研・桜木 貢  
本宮 峯生・中川 端午 (北海道脳神経外科)  
三森 研自・都留美都雄 記念病院

悪性脳腫瘍が転移性脳腫瘍の形で発見される事は比較的多いが、小脳橋角部への転移は稀である。今回我々は、小脳橋角部に孤立性に発見され同部位での原発性腫瘍との鑑別が術前に困難であった1例を経験したので報告する。

症例は62歳女性。頭痛、めまい、進行性の歩行障害を主訴に来院。MRIにて小脳橋角部にCystを伴い実質部分に増強効果を持つ腫瘍を認めたため、神経鞘腫の診断のもと手術を行った。病理組織診断では粘液産生性の

分化型腺癌であったため、現在原発巣の検索を行っている。

小脳橋角部の転移性脳腫瘍について文献的考察を加え報告する。

2A-95) 腎癌転移性脳腫瘍に対する外科治療

野村 耕章・栗本 昌紀  
西島美知春・遠藤 俊郎 (富山医科薬科大学)  
高久 晃 脳神経外科

【目的】腎癌の脳転移症例の臨床経過を検討し積極的な外科治療が有用であることを強調する。  
【対象および結果】症例は過去12年間に経験した7例である。年齢は53~75歳、平均65歳で全例男性であった。5例は腎癌の初期治療(腎切除+化学療法)の0~63カ月(平均32カ月)後脳転移が発見され、2例では肺や脳転移にて初発した。脳転移巣は単発性4例多発性3例で、3例は他臓器転移を伴う進行癌であった。多発性2例を含む6例に開頭術を施行し、5例では臨床症状の改善が得られた。脳転移巣治療後の転帰をみると死亡5例では、生存期間は2~31カ月(平均13カ月)で、死亡原因は肺転移による呼吸不全や消化管出血などであった。2例は脳転移から3カ月と43カ月経過した現在生存中である。  
【結論】腎癌脳転移は、原発病変の治療後長期間を経てから発生することが多く、他臓器転移を伴っていても比較的長期の生存が期待でき積極的な脳転移巣摘出術が有効である。

2A-96) 転移性脳腫瘍非手術症例に対する抗癌剤動注併用放射線療法

栗本 昌紀・西島美知春  
野上 子人・桑山 直也 (富山医科薬科大学)  
高久 晃 脳神経外科  
平田 仁 (同 第一内科)

【目的】転移性脳腫瘍の非手術例に対して、シスプラチン(CDDP)あるいはニドラン(ACNU)動注を併用した放射線療法を行い、良好な結果を得たので報告する。

【方法】対象は過去3年間に治療を行った転移性脳腫瘍症例24例中の9例で、年齢は44歳から76歳である。組織別内訳は肺癌8例(腺癌3例、扁平上皮癌2例、大細胞癌2例、小細胞癌1例)、乳癌1例である。脳転移の診断時点でCDDP 30~100mg、ACNU 100~150mgを頸動脈あるいは椎骨動脈に注入し26~60Gyの照射を行った。  
【結果および結論】治療効果はCR 2例、PR 5例、NC 2例で奏功率は78%であった。死亡8例の平